

ウィリアム・サロイアンの『人間喜劇』論： この作品の特色及び根本思想

立 山 昇

(1996年1月24日受理)

I

ウィリアム・サロイアン (William Saroyan) の *The Human Comedy* は『人間喜劇』と訳すことができる。このタイトルが示すとおり、この小説は喜劇であることは確実である。では喜劇とはいったい何であろうか。それは、人間の織り成す様々な営みの様相が、結果として円満に終わる、ないしは、それら人間の営みが、全体的に見て、楽観的な考え方に支配されている、ということになるだろうか。

私はこの論考で、この作品のもつ特色について述べ、さらには、その特色の底に流れる根本的な思想について述べたい。

II

まず『人間喜劇』の持つ特色がいくつかあるので、それらについて述べよう。そうすることによって、この作品の全体像を、より鮮明にとらえることが可能になるだろう。

第一には、この作品には、現実主義とでも呼べるような特色がある。それは人生の生き方、ないし、人生への対応の仕方が、現実主義的である、というものである。

“Future?” Homer said. He was a little embarrassed because all his life, from day to day, he had been busy mapping out a future, even if it was only a future for the next day. “Well,” he said, “I don’t know for sure, but I guess I’d like to be somebody some day.”⁽¹⁾

ここには現実主義と呼べる作者の考え方が表明されている。スパングラー氏がホーマー少年に聞く、「君はどんな未来を描いているのかね。」と。それに対してホーマー少年は、「私は現在のことで頭がいっぱいで、未来のことなど考えている余裕はありません。」と、答える。つまりここで、ホーマーは現在をせいっぱいに生きている。そうすべきだという姿勢を、口にしている。そのような現実を一生懸命に生きる、という考え方に注目する必要がある。これは、この作品の持つ、ひとつの特色だと言える。

III

『人間喜劇』のもつ第二の特色は、楽観主義的な物の考え方とでもいえようか。この特色が表れている箇所は数多くあるが、一つだけ引用しよう。これはホーマーがマコーレー夫

人に向かって言う言葉であるが、実に簡単な表現である。それは、“Everything’s all right.”⁽²⁾ という言葉である。これは大変簡潔で、極めて我々に解かりやすいものである。「全てよし。」「全部大丈夫。」「全部 O. K. だ。」などと訳することができる。人生に苦しいこと、つらいこと、いろいろあるが、それらは結局は、心配ない、大丈夫なのだ、ということである。

この言葉の背景には、「全ては善である。」「人間は善である。」という考え方がある。現実の人生を見ると、いろいろな、よくないこと、いやなこと、つらいことがある。死、裏切り、悪行、憎しみなど、さまざまな悪といえるものが、毎日行われていたり、又、心の中で生じている。けれども、それら人生の様々なことがらは、別な観点から見ると、究極的には、善であり、全てはよし、と結論づけられるものであると、作者は考えている。現実にかき起こすことや、人生そのものを変えることはできないが、それらを体験したり、見たりしている、人間の側、つまり主体の考え方、ものの見方を変えることはできる。つまり、「全てはよし」と思って、心の底からそう信じて、現実や、人間や、人生を見ることによって、悪も善もひとつ、すなわち全ては善である、という結論に達するということが、この作品に登場する人物や、出来事を見ていると、解ってくる。

この第二の特色は、この作品を素晴らしいものになっている。この楽観的なものの考え方が、この作品の大きな魅力になっていて、この作品の喜劇性をより際立たせている。

IV

『人間喜劇』の第三の特色は、こっけいな人物の創造にある。この小説中のほとんどの人物がそうである、ともいえる。まず主人公のホームーである。ホームーは、基本的には、真面目な少年である。母を助けて、家計の貧しさを救うために、学業のかたわら、仕事をしているのだから、真面目であるのは間違いない。しかし同時に、彼は、こっけいな人物として描かれている。たとえば (pp. 43~52) Chapter 10 の “The Ancient History Class”⁽³⁾ にでてくるホームー像は、それが強調されている。教室の中で、古代史の授業中に、自分の好きな女の子ヘレン・エリオットが、おなじクラスの男の子、ヒューバート・アクレイ 3 世に取られたと思い、彼を憎み、悪態をつく。授業中にもかかわらず、二人は授業を乱し、他の生徒の勉強の妨げをして、先生からも嫌われてしまう。

第10章にでてくるホームーは、女性を恋するが故に、自己の感情に流され、その結果、自分の醜さをさらけ出し、他の人々に嫌われるのである。このような不完全な人間の言動は、読者にとって、こっけいに見える。こっけいさというものは、全ての人が、多少の差はあるにしても、持っているものである。それゆえに、他人のこっけいさを、自分も許すことができ、そこにおかしさを感じられ、そうして、物事の結末が楽観的に終わる。つまり、全体は喜劇になってくる、ということになる。

V

この小説の特色の第四は、小説中の人物たちが失敗することが多いということである。失敗しようと思図して、失敗するのではなくて、成功しようと思って一生懸命に頑張るが、

失敗してしまうのである。しかし、それゆえに、人間らしさ、また、こっけいさが感じられるのである。

その例として、ホーマーが、ハードル競争に備えて、フェンスをハードルに見立てて、練習している場面を取り上げてみよう。

When he was near enough he made a beautiful hurdle, kicked the fence, knocked down part of it, and himself fell in the weeds, but got right up and went back for another try. Altogether Homer made seven tries, not one of which was successful. He stopped only when the whole fence had been brought down into still greater ruin.⁽⁴⁾

フェンスを飛び越えようとして、7回やってみたが、全て失敗に終わる。真面目であればあるほど、おかしさが滲んでくる。最終的には木材が音を立てて壊れてしまった、というのであるから、まるで、実際に見ているかのように、我々には感じられる。

この場面の効果はホーマーが、おもしろさを出そうとしているのではなく、逆に、真剣に、必死になってやっている。だが、見事に失敗に終わるというところにある。真剣にやっているのだから、失敗したら、同情の念がわきおこりそうだが、そうではなくて、おかしさ、おもしろさが、読者にはわきおこる。これは、他人の失敗は、見ているものにとっては、おもしろいものだ、ということであろう。

VI

『人間喜劇』のもつ、第五の特色は、人間たちが完全で、円満な姿ではなく、むしろ、偏見を抱いた、欠点のある姿で、描かれているところにある。その例として、ヘレン・エリオットが挙げられる。ホーマーは、彼女に恋心を抱いており、「エリオットは、世界一美しい。」と思っている。しかし、彼女は実際には、偏見を抱いた、不完全な人間として、描かれている。

Without a doubt this girl was the most beautiful girl in the world. Beside that, she was a snob—which Homer refused to believe. Following her came Hubert Aclay III. When Hubert reached Helen the two whispered a moment, which made Homer sick with envy and anger.⁽⁵⁾

作者サロイアンは、ヘレン・エリオットを、「俗物」だといっている。悪人ではないけれど、欠点のある、公正な考えをもっていない、不完全な女性として描かれている。ホーマーは、エリオットを、崇拜している。また、彼女の美しさを、とても愛している。しかし、彼女の心の中、つまり俗物根性を、にがにがしく思っている。そこで作者は、女性の持つ欠点を描くことによって、人間味を醸し出している、と同時に、こっけいさ、おかしさをも、与えている。

サロイアンの描く女性は、美しく、すばらしい、というよりは、欠点の多いもの、として

描かれる場合が多い、といわれているが、たしかに、ヘレンの描き方には、それが、あてはまる。女性を、冷めた目で見ており、天使的、崇高なものとしてではなく、欠点のある、不完全なものとして描かれていて、笑いの対象にすらしている。

VII

前節までに、『人間喜劇』の持つ五つの特色について述べてきた。それら五つの特色は、この作品を喜劇たらしめているのに役立っている。さらには、この作品を、おもしろい、魅力あるものにするのに、役立っている。

さて次に、以上の諸特色のある、この作品を作り上げている、作者の根本思想が、この作品中に見られ、それが、この作品を、深みのあるものにしていないかと思われる。それで、それら根本思想を、この作品の中に見いだしてみたい。

まず第一には、人間平等の思想である。次のヒックス先生の言葉の中に、サロイアンの人間平等の思想が表明されている。

In a dramatic state every man is the equal of every other man up to the point of exertion, and after that every man is free to exert himself as he chooses. I am eager for my boys and girls to exert themselves about behaving with honor.⁽⁶⁾

ここで、「すべての人間は平等だ。」と、ヒックス先生は言っているが、こういう人間平等の思想は、すなわちサロイアン自身の思想である、といってもよからう。すべての人間、金持ちも、貧乏人も、すべての宗教の人も、すべての民族も、世界中のどんな人間も、平等であって、それらの人間の間には差異はない、また、あってはならないのだという、強い信念である。したがって、「すべての人間は自由だ。」ということになる。

そのような人間は平等である、という考えは、サロイアンがアルメニア人移民の子供として、アメリカに生まれ、貧しい家庭に育った、自分の、惨めな、幼・少年時代を過ごしたという体験から生まれた。いわば、アメリカの中では、少数派であった作者は、苦しみ、悲しみの中から、自分も、他のすべての人々と平等なのだ、という考えに到達したのであった。現実社会、職場、学校において、人間が平等に扱われているとは、思っていなかった。むしろその逆であり、その実感から、自己は、自由で、価値ある存在であり、その自己自身は、他の人々と平等であり、そのように扱われなくてはならない、と考えたのである。たとえば、サロイアンは、アルメニア語で、アルメニア人の友人と話していると、学校の先生から、「アルメニア語を話さなさんな。英語で話さなさい。」といわれ、立腹する。自分は、アルメニア人だという意識、そして、その言葉すら禁止されるということ、そういう体験の中から、彼は、自分が、自分の民族が、アメリカの学校の中ですら、平等な存在として扱われていないことを知る。それ故に、自分は、絶対多数である他の民族や、他の人々と同じように、平等なものとして扱われるべきであると、信じるようになるのである。

VIII

次に第二の根本思想は、「自分自身であれ。」という考えである。次の引用も、ヒックス先生の言葉からであるが、彼女は次のように言う。

I want each of my children to be himself.⁽⁷⁾

更に続けて、次のように言う。

I want my children to be *people* —each one separate—each one special— each one a pleasant and exciting variation of all the others.⁽⁸⁾

このヒックス先生の言葉は、作者サロイアン自身の言葉と言ってよかろう。それは「自分自身であれ、しかも独立していて、他のすべての人々と、楽しい、わくわくするような違いをもった、そういう独自性をもっている、自分自身であれ。」ということである。個性のある、しっかりした自分自身を持つて、ということである。

こういう考えは、エマソンやホイットマンの考えによく似ていて、「自分自身であれ。」という考えは、現在では、アメリカ人に一般的となった考え方と一致する。しかし、サロイアンは、ここで、そういう一般的アメリカ人の考え方を述べているのではない。サロイアン自身の、苦しく、悲しい人生の中で、生み出された、彼自身の考えを、ここで述べているのにすぎない。それは、サロイアンの根本思想と言ってよい。彼の文学の形式についても言えることだが、彼自身の独特の文学を生み出した。筆者は、それを、「私小説的」文学と呼びたいのだが、アメリカ文学の中では珍しい「私」を、作品の中で、大きく前面に出した作品群を作り出した。あるときは、生のままで自己を出し、あるときはフィクションとして自己を色濃く滲ませている。そして、サロイアンの文学は、強烈な自己表明を行うという、彼独特の文学世界を作り上げている。

IX

第三の思想は、善、悪が共存している現実を、あるがままに受け入れよう、という考えである。それを何と名づけようか。善、悪の共存、または、善、悪の受容とでも言おうか。現実主義というのではない。現実をあるがままに受け入れようという考えである。グローガン氏の言葉を引用しよう。

「全ての人々は一つだ。」と彼は言った。「君が一個の人間のように。そして、君に善いところと同時に悪いところがあるように、全ての人の中に、善いところと悪いところがある。全ての人の中に、あらゆる国々のあらゆる人々のうちに、善と悪は、一しょくたになって、存在している。うん、われわれの国民のうちにおいてもだ⁽⁹⁾。

個人の中で、善と悪が共存している。それと同じように、全ての人々の中でも、また全ての国々の人々の中にも、同様に、善と悪が共存している。悪は善といっしょになって、全ての人々の中に存在しているというのである。しかも、善、悪は、ただ共存しているのではなくて、体の中で、常に戦い続けているのだ、というのである。このことについて、グローガン氏の言葉として、次のように述べられている。

人の良心が、その人の性質の中にある反対のものと闘うように、こういった反対のものは、生きている者の全体つまりこの世界の中でも、闘いを起こす。そして、こういった場合に戦争が起きるんだ。われわれの身体も病気と闘う。だが、心配せんでもいいよ。というのは、善は永遠につづくが、悪は、現れるたびに追っ払われてしまう⁽¹⁰⁾。

善と悪とは、全ての生き物の中で、もがき、闘っている。やがては、善が勝ち、悪は敗れ去るのだ、と作者は言う。善、悪の共存とはいっても、やがては善が勝ち、悪が滅びる、と考えているので、サロイアンは、性善説の側に属している。つまり、全てのものの根本には善があって、悪は表面的なものなので、最終的には、善が悪に勝つのだ、という考えである。いいかえると、世界の実体は善である、という考えに、サロイアンは立っている、といえる。

X

さて、第四の思想は、人間は善である、という考えである。この考えは、第三の思想、つまり、善、悪は、共存しているという考えと、一見矛盾していると思われる。しかしそうではない。善、悪共存の思想は、最終的には善は悪に勝つというものだった。つまり、第三の思想も、根本をたどると、性善説にたどりつく。そういう点で、人間は善であるという考え方を踏まえているということになる。さて、人間は善であるという考え方だが、この作品の中に、この思想があるのは確かである。一人の若者がピストルを持って、電報局へ強盗に入って来た。そして、彼は、スパングレー氏に、金を出せ、と迫る。そこで、スパングレー氏は、その男に金を出して、次のように言う。

“I’d give you the money, anyway,” Spangler said, “but not because you’re pointing a gun at me. I’d give it to you because you need it. Here. This is all the money there is. Take it and get on a train and go home. Go back where you belong. I won’t report a theft. I’ll make it good myself. There’s about seventy-five dollars there.”⁽¹¹⁾

この強盗をしに来た若者は、金がなくて、故郷に帰りたいが、帰る金がないので、強盗をしに来たのだという。そこでスパングレー氏は、このお金をあげるから、持っていきなさい。後のことは自分で処理して、事件にはしないから、心配しないで、お金を持って、汽車に乗って、故郷に帰りなさい、というのである。

これは、サロイアンのフィクションだと思うが、事件そのものは、フィクションだとしても、こういう場面は、サロイアンが、よく心の中に描いていたものと思われる。サロイアンは、店員をしていたことがあり、その時、店に来る客で、商品を盗む人が時々いた。しかし、それを見つけても、知らないふりをしていた。なぜなら、そういう人たちは、盗みたくて盗むのではなく、貧乏だから、しかたなくて、そうしているにすぎないのだ、と、サロイアンはエッセイの中で述べていることがある。

サロイアンは悪なる行為をしていても、それは、行為の問題であって、内なるもの全てが悪なのではない、と考えている。つまり人間は善なのだ、という考えに立っている。さらに言い換えるならば、人間に対する優しい心、全てを評価してあげたい、という心がある。それがサロイアンの作品を心暖まるものにしてしているし、また、我々に感動を与えるのである。この作品には、悪人は一人もいない、といえる。この若者にしても、悪人としては、描かれていない。故郷に帰りたい一心で、つい悪いことをしてしまう。しかし、根っからの悪人ではなく、普通の若者として、描かれている。

XI

最後にサロイアンの『人間喜劇』について、結論を述べたい。

この作品は喜劇だが、人間の感情をありのままに描くことによって、読者に深い感動を与えている。その例として、一つ取り上げてみよう。

雑貨店を営む Ara という父親とその息子とのやり取りである。息子は店に並べているりんごが欲しい、というので、父親はりんごを取ってやる。すると子供は、それをちょっと食べただけで、いらぬ、という。父親は息子の食べ残したりんごを食べる。次に息子は、オレンジが欲しい、という。父親は、「最も大きなオレンジ」を取って、息子にやる。息子はそのオレンジを、少し食べただけで、いらぬ、という。父親は、しかたなく残りのオレンジを食べる。次に息子は、今度はキャンディ（お菓子）が欲しい、という。父親は、ショーケースの中から、キャンディを取って息子に与えるが、またもや、息子は、少しだけしか食べない。そここのところの引用である。

Once again the son returned to the father another substance of the world which had failed to bring him completion. Patiently the father accepted the responsibility—to avoid waste. He picked up the candy bar, started to bite into it and then changed his mind. He turned and flung the candy into the garbage can.⁽¹²⁾

この父親は、遠い国からアメリカへ移住して来て、その異国の地で、商売をして暮らしている。その父親が、息子の移り気な要求をすぐに聞き入れる、という、子供に対する、あふれるような父親の気持ちが、読者に伝わってくる。これは、ユーモアあふれると同時に、悲哀も感じさせてくれる。いわば人間味あふれる描写となっている。

サロイアンのこの作品は、全体的には喜劇であるのは確かだが、それは、人間味あふれる、涙と笑いとが一杯の世界を作り上げている。そこには、悪人は一人もいない。強盗でさ

え、善人として描かれている。苦しみ、悲しみを、一杯かかえている人々が、お互いに許しあい、慰め合いながら生きている世界、それを、サロイアンは、この作品の中に作り上げた。それはサロイアンが、人間は善であるという思想を抱いていて、それを、作品として作り上げようと、意図していたからに外ならない。そしてこの『人間喜劇』は、ロマンチックすぎる、と非難する人があるかもしれないが、万人の心を打つ、味わい深い作品になっている。

注

- (1) William Saroyan. *The Human Comedy*, Harcourt, Brace & World, New York, 1971, p. 13.
- (2) Ibid., p. 28.
- (3) Ibid., pp. 43-52.
- (4) Ibid., p. 40.
- (5) Ibid., p. 45.
- (6) Ibid., pp. 60-61.
- (7) Ibid., p. 61.
- (8) Ibid., p. 61.
- (9) ウィリアム・サロイアン (小島信夫訳), 『人間喜劇』, 晶文社, 1977年, p. 123。この版は, William Saroyan, *The Human Comedy*, Dell Publishing Company, N. Y., 1943 をもとにしている。この引用の部分は, ハーコート・ブレイス社の1971版では, かなり異なっていて, この引用部分は, 全て削られていて, 全くない。筆者は大切な部分と考えるので, あえてこの部分は, 小島訳から引用した。
- (10) Ibid., p. 123. この部分も小島訳からの引用だが, 9と同様ハーコート・ブレイス社の1971年版では, 全て削られているので, 小島訳より引用した。
- (11) William Saroyan, *The Human Comedy*, Harcourt, Brace & World, New York, 1971, p. 124.
- (12) Ibid., p. 151.